

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

9

2010 September/October
TAKE FREE

特集
出羽三山への道

庄内憧憬
大石芳野
写真家

Cradle

美しくつかしい、日本をのせて。
「クレードル」出羽庄内地域文化情報誌

2010 September/October
平成22年9月4日発行(寄附月第一土曜日発行)第1巻1号(通巻1号)

発行/Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15株式会社 出羽庄内地域文化センター 電話0235(64)0888
制作/Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3「コナツ」コーポレーション 電話0234(41)0012



住友林業
 ☎0235(35)1233
 ㊟火・水曜日

スモリの家
 ☎0235(35)1344
 ㊟水曜日

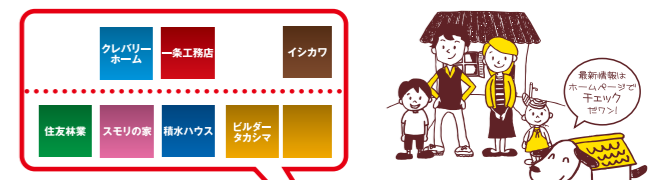
積水ハウス
 ☎0235(68)2135
 ㊟火・水曜日

ビルダータカシマ
 ☎0235(22)6037
 ㊟水曜日

クレバリーホーム
 ☎0235(68)0151
 ㊟火・水曜日

一条工務店
 ☎0235(29)7181
 ㊟展示場は無休

イシカワ
 ☎0235(64)0640
 ㊟水・木曜日



ROC 庄内みかわ総合住宅展示場

庄内みかわ総合住宅展示場

山形県東田川郡三川町大字猪子字大堰端331番地8

Tel / Fax. 0235-66-2003

URL www.mikawa-sjt.com

E-mail roc@mikawa-sjt.com

庄内みかわ総合住宅展示場 検索



ROC 株式会社 ロック

【管理棟】 常 10:00~17:00 ㊟水曜日
情報コーナー、駐車場、トイレ、キッズコーナー、自動販売機、喫煙コーナー

本社/山形県鶴岡市大宝寺町3-51 tel.0235-23-9400/fax.0235-23-9134

(社) 全国宅地建物取引業保証協会会員、(社) 山形県宅地建物取引業協会会員、宅地建物取引業免許:山形県知事(4) 第1762号、建設業許可:山形県知事許可(特-18) 第701365号



はじめまして、 クレードルです。

9月を迎えてなお残暑が続きます。皆さまには、お変わりなくお過ごしでしょうか。

私たちが暮らす庄内から、新たな庄内の魅力と価値を創り出すことをテーマに、「クレードル」創刊号を皆さまのお手元にお届けいたします。

伊藤珍太郎さんが残された名著『庄内の味』の巻頭に、藤沢周平さんが序文を寄せられています。その文中に、「この本を読んで、庄内のひとは土地のたべものを少々自慢してもいいだろうし、他郷に出ているひとは、故郷の味を思っ

て泣くべきである」という、ここに響く一節があります。

時代の価値観がどのように変わろうとも、「庄内」という風土は、日本人のこころの奥底に眠る故郷を多少とも誇りたい理由、あるいは故郷を思っ泣くべき理由を抱かせるような土地柄のように思われてなりません。安らかで満ち足りた、母親のぬくもりにも似た原風景を内包しているかのような。

「クレードル」は、忘れかけていたはるか遠い日の匂い、庄内の清々しいただずまいを感じていただけるような誌面を、隔月でお届けしてまいります。

今後ともご期待ください。

「クレードル」発行人

佐藤茂枝



庄内の人びとが、日常のなかで持ち続けてきた自然への畏れこそが真なる宝であり、わたしたちを魅了するのではないだろうか。

庄内の、底なし沼のような
奥深さに魅せられて。

大石芳野 文・写真

庄内には若いころにも何度か訪れたことがあった。初めての地は酒田だった。百年以上も現役で残り続けている港の米蔵、山居倉庫に惹かれるものを感じた。本格的に撮影しようと思ったのは、ずっと後の一九七七年、枝垂れ桜が見事に咲いているころだった。きつかけは、桜の下で旧庄内藩主酒井家十七代当主の故酒井忠明さんと談笑するなかで、「殿様」と親しみと尊敬の念を込めて呼ばれていた酒井さんの白黒写真を目にしたことだった。その後、多くの人たちとの出会いが生まれることで、迷うほどにも奥深い庄内を、わたしは今でも訪れている。

底なし沼のような魅力に入り込んで二十余年になるが、庄内とひと口にいっても、鶴岡、酒田とそれぞれに個性が強く、どの地も多種多様だ。簡単に分かるからこそその魅力というものもあるだろうが、知ろうとしてもなかなか触れられないもどかしさは逆にこだわりとなってわたしを虜にしてしまい、いつまでも気持ちの中に居座り続けてしまう。庄内はわたしにとって、その通りの地になっている。そのひとつが黒川能だ。

鶴岡市櫛引地区の黒川に五〇〇年も前から伝わるこの能演が、農民によって受

け継がれていることに驚愕を覚えるのは、わたしばかりではないだろう。この辺りは庄内平野の中でもとりわけ農村が昔ながらの姿を醸し出している。月山、湯殿山、金峰山、母狩山などに囲まれ、少しずれると、はるかに鳥海山をのぞむ。

一九九八年、雪の吹き積もる黒川で初めて能演を見る機会に恵まれた。春日神社の神を祀る壬祇祭の時期で、村人にとっての正月にも当たる。新たな年明けを祝い、慶び、天地の神に豊作と安泰を祈る大事な儀式である。昔から日本人には正月のために生活しているような風習が残されているが、黒川の人たちの暮らしの暦はまさに壬祇祭に始まるということ、このとき感じた。農民たちが袖の中から無骨な手や日焼けした首を覗かせながら舞う舞台に強く惹きつけられた。明かりは蠟燭と、舞台となった当屋のお宅が日ごろ使っている電灯だけだ。舞台の周辺に観客がぎっしりと座り、膝を崩すゆとりもないほどである。

夕刻から夜明けまで延々と、能と狂言、それに鼓、小太鼓、笛、そして謡が続く。面も衣裳も骨董的な価値が十分うかがえるものばかりだ。本物を纏った農民たちが舞い謡う情景は、現代の世とは思

えない凄味がある。今は亡き作家の立原正秋さんも著書『雪のなか』でそのことをこう綴っている。「殆ど直感的に黒川村には中世がそのままいきているのではないか、と思ったのである」と。

彼の著から三十年以上は経つし、わたしが通い出してからも十年以上になった今、当屋をする家は徐々に少なくなり、公民館へとその舞台が移りつつある。けれど立原さんの、「黒川能が連綿と受けつがれているのは、大衆化というよりは日本人の芸術的感覚の問題だろう」という考えには多くの人たちが頷く。

時代は近代から現代へと移り、あらゆる分野で価値観が揺らぐ混沌、混沌の状況を迎えている。だからこそ、例えば庄内の人びとが積み上げてきた歴史のなかにある確かな知能と芸術性の価値は、わたしたち日本人が求めている精神性の極みでもある。人びとがそれぞれの日常で大地や天への畏れをしっかりと持ち続けてきたことが、真なる宝なのだろうし、普遍的なものとなって、わたしたちを魅了してやまないのではないだろうか。



『黒川能の里 庄内にいだから』(大石芳野・写真、馬場あき子・文、清流出版)より、「絵馬」を舞う後シテの天照大神。

おおいしよしの／東京都生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業後、写真家として活躍。一九八二年「無告の民」(岩波書店刊)の日本写真協会年度賞に始まり、芸術選奨文部大臣新人賞など受賞多数。二〇〇一年には『ペトナム凜と』(講談社刊)で土門拳賞受賞。他に『子ども戦世のなかで』(不発弾)と生きる祈りを織るラオス(共に藤原書店刊)などの写真集がある。

羽黒山登拝

出羽三山への道

羽黒山、月山、湯殿山からなる「出羽三山」は古来よりよみがえりの霊山として人々に信仰されてきた。近年は、パワースポットとしても名を知られ、「ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン」では、羽黒山の杉並木が三ツ星、五重塔と齋館、三神合祭殿が二ツ星に輝き、山形県を代表する観光地として、世界中から注目を浴びている。今回はその御山の神秘に導かれて出羽三山歴史博物館の渡部幸さんの案内のもと、文政13年(1830)に描かれた「羽黒山絵図」を手に、江戸時代の道者になった気分です。羽黒山の参道を歩いた。

トビラ写真撮影 八尾坂弘喜
写真協力 出羽三山神社
取材・編集・写真撮影 C&D 編集部

出羽三山を あるく

松例祭に向けて山伏が家々を巡る
「松の勧進」は庄内の風物詩。
百日間の修行中の松聖が、
旧城下を勧進する12月1日は、
一番に酒井家を訪れるのが恒例。
法螺貝の音が街に響き渡ると、
毎年、年の瀬を実感するのだ。

酒井賀世 文 渡部幸 案内役

参道は下り坂からはじまり、
ここで二度、死を体感する。

「まずは死者の気持ちになつてく
ださい。今から、神仏習合のい
しえを振り返りながら、極楽浄土
への道をご案内します」。神域の
入口【随神門】の手前で、渡部さ
んはこう言った。随神門をくぐり、
杉並木に囲まれた急勾配の【継子
坂】を下る。三山を案内する先達
は、曼荼羅のストリーを語りな
がら道者を導き歩くという。坂を
下った先には【五十猛神社】、絵
図では閻魔堂となっている。「明
治の廃仏毀釈で、羽黒山のお堂は

仏様を神様に変えてまつっていま
す。五十猛神社は木の神様、すぐ
先の【大年神社】は穀物の神様で、
旧・勢至堂。明治以降は農耕の神
の山として豊穰を願い、山と木と
水という自然界の神々を配置した
んですね」。その先の【祓川】は
三途の川、そこに架かる【神橋】
は無明橋を意味する、この世とあ
の世の境界線。橋を渡ると川の番
人の姥をまつる姥堂があった。姥
は奪衣婆のことで、死者の衣を剥
ぎ取り、その衣を【注連掛桜】に
かけ、枝垂れ具合で悪行を判断し
たという。以後は行者がこの木に
注連を掛け、祓川の冷たい雪どけ
水で罪穢れを祓い流すものとされ、

その襖を終えた者だけが極楽浄土、
神のもとへ向かうことが許される
のだ。そしてここが山の谷底、つ
まり地獄の果てを意味していた。

古来の土着信仰が息づく
静寂の杉並木を歩く。

その右奥が、第50代別当の天宥
が月山近くの水呑沢から水を引き
入れたという【須賀の滝】。絵図
では参道の先に阿弥陀如来をまつ
る念仏堂、そばに七観音堂が控え、
まさに死者を迎える阿弥陀来迎図
を描いている。緩やかな石段を進
むと【爺杉】がそびえ、放たれる
生命力に圧倒される。そして、国
宝【五重塔】が厳かな姿を現した。



酒井賀世さん(左)

致道博物館 学芸員
庄内藩酒井家第18代当主・酒井忠久さんのご長
女で、致道博物館の学芸員として多方面で活躍。
現在は、日本海さらさら羽越観光圏推進協議会委
員、山形県文化財保護審議委員、平成22年度山
形県観光事業審議委員会など活動は多岐に渡る。

渡部幸さん

出羽三山歴史博物館 学芸員
1957年旧立川町生まれ。弘前学院大学文学部卒
業。民俗学者の故・戸川安章氏に師事、出羽三山
の歴史を学ぶ。羽黒山を拠点に各地の講演会など
にも講師として招かれている。庄内民俗学会会員。

出羽三山は三つで一つの御山。三山が「三関三渡」を示すように、
羽黒山の三つの坂からなる参道も、過去、現在、未来を示している。



五重塔

平安時代、平将門の創建と伝えら
れる東北最古の塔。柿葺きの三
間五層の素木造、高さ29.9m。現
在の塔は約600年前に再建され
たもの。なお、明治10年までは月
山も湯殿も女人禁制だったが羽
黒山だけは許されていたことから、
当時、女性は塔の前にあった「血
ノ池」に血盆経を納め、救済を祈
ったという。

須賀の滝

天宥が滝を築いた目的には、景観
形成のほかに、新田への水利が
あった。日中は滝へ水を落とし、夜
は水田に引いて経済の立て直しを
図ったという。明治までは滝壺に3
m程もある不動明王をまつっていた。

爺杉

樹齢1000年、樹高30m、幹囲8m
ほどもある老巨木。かつて、近くに
「婆杉」がそびえていたが、明治
35年の台風で倒木。山内の600
本に及ぶ杉木の中でもっとも古い。
国指定天然記念物。

継子坂

継母が先妻の子に辛くあたってこの
坂から捨て、坂の下にその子が彷徨
い歩いた足跡が残ったという伝
説から名付けられた。現在の磐裂
(いわさく)神社、根裂(ねさく)神
社は、旧子安観音堂と子安地藏堂。

祓川

道者も諸人もこの川で穢れを祓った
ことに由来。江戸のはじめまでは随
神門から山に入らず川伝いに入った。
神橋を渡る前にお祓いをして人形を
この川に流す行為は昭和30年代頃
まで続いたため、いまだ知る人も多い。

杉並木

随神門から山頂まで1.7kmの参道に連なる杉並木は樹齢300~500
年。このあたりの土壌は赤土の粘土質で杉が根付きにくく、天宥は
祓川から小石を拾い集めて、一つ一つに法華経を一字ずつ墨で記
し、地に埋めて植林をしたところ、すべての苗が根をおろしたという。

随神門

かつては仁王門と呼ばれ、二王尊
が仏教に害を及ぼすものを撃退し
ていた。現在は、櫛石窓神(くしい
わまどのかみ)、豊石窓神(とよ
いわまどのかみ)が悪霊の侵入を防
いでいる。二王尊は黄金堂に安置。





現世を生きながら、何度でも生まれ変わりたいという尊い願い。出羽三山には神仏習合の名残とともに、衆生済度の信仰が根強く残る。

三神合祭殿

かつて羽黒三所大権現をまつたお堂。高さ28mの社殿の内部は総漆塗。山伏の十界修行にちなんで社殿の階段は10段。社殿の2度の焼失により、海老虹梁を支えている力士の姿は、再建前は両手で支えていたのが、再建後は肩に担いだ形となっている。国指定重要文化財。

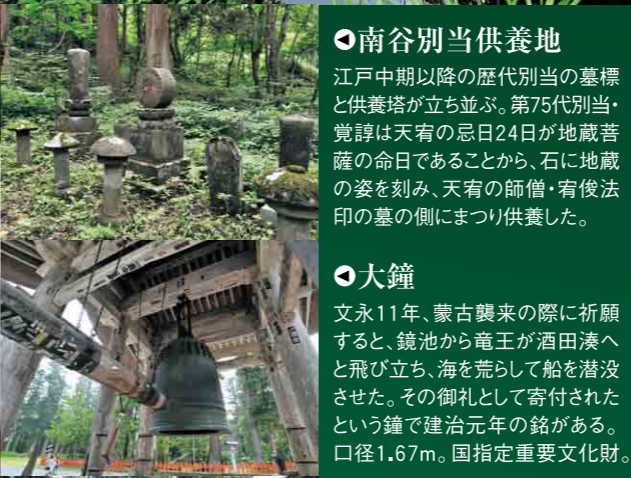


二の坂

別名：油こぼし、弁慶の油こぼし。昔、燈明に使う油を持って坂を上ったが、油がこぼれるほど急だったためにこう呼ばれるようになったという。さすがの弁慶も疲れて油をこぼしたという説も。

鏡池

池や川は低地にあるとして山上の池は神聖視された。水面に月が映るため、人々は命を司る月に向かって、鏡を投げ入れ願ったとされる。この池中納鏡の信仰は平安時代から。歴史博物館で古鏡を展示している。



南谷別当供養地

江戸中期以降の歴代別当の墓標と供養塔が立ち並ぶ。第75代別当・覚諄は天宥の忌日24日が地藏菩薩の命日であることから、石に地藏の姿を刻み、天宥の師僧・宥俊法印の墓の側にまつり供養した。

大鐘

文永11年、蒙古襲来の際に祈願すると、鏡池から竜王が酒田湊へと飛び立ち、海を荒らして船を潜没させた。その御礼として寄付されたという鐘で建治元年の銘がある。口径1.67m。国指定重要文化財。

霊祭殿

合祭殿をお参りした後に、先祖の霊を供養する習わしは、神仏習合の名残。昭和58年に建てられた社殿の天井画は熊沢富士夫画伯による「天女と竜」。竜神に守護された天界に祖霊が昇天することを願うもの。



二の坂茶屋

二の坂をのぼったところにある茶店では、246段の石段を踏破したことを証明する認定証をいただくことができる。「元祖・力餅」を食べて山頂へと向かうエネルギーを充電。

南谷

第50代別当・天宥が寛文2年～3年にかけて、山上の別当寺を移転し、整備した場所。元禄2年、松尾芭蕉が逗留したところで、また、かつての山伏修行の一の宿でもある。三の坂から右手の下道500m先付近。

三日月塚

三日月亭があったことに由来し、江戸時代中期に鶴岡の佐川李夕ほか俳人連衆が芭蕉を顕彰して句碑を建立。この奥の敷地が、別当寺「寂光寺宝前院」があった場所。その広さは680坪といわれる。



齋館

江戸時代の長屋門を構える、山内でもっとも古い建物。旧・花蔵院(けぞういん)。廃院を免れ、唯一齋戒所として残った。現在は参籠所として、庄内平野を一望しながら精進料理をいただくことができる。

出羽三山をあるく

本来は仏舎利塔としてお釈迦様の骨を納めるための塔だが、この塔には観音様がまつられていた。「五重塔を東に向かって拝みます。観音様は、その師である西側の阿弥陀様を拜んでいるので、私たちは観音様に手を合わせる形です。人々の声を正しく聞く聖観音が、阿弥陀様に私たちの声を伝えてくれるということですね。現在は何度も死んで甦る大國主命をまつっています」。

松尾芭蕉の足跡をたどる。険しくも幽玄な参道を進む。

そしていよいよここからは、現世の幸せを与えてくれる観音の補陀落浄土への道。果てしなく続く「一の坂」から先が、天宥が築いたという石段。苔むした2446段に刻まれた天狗やひょうたんなどを探しながら、ゆっくりと上る。この彫物を多く見つけると願い事が叶うのだという。この参道は「産道」に見立てられ、険しい坂道を上ることで生まれ出る苦しみを疑似体験させている。「二の坂」を上りきってすぐの【三日月塚】には、松尾芭蕉が月山と湯殿山を詠んだ句碑がある。「月日は百代の過客にして行かふ年も又旅人也」で始まる『おくのほそ道』。出羽

三山はその旅の目的地のひとつとして語られる。元禄2年に芭蕉がこの地を訪れた時、ほのかな三日月の光に照らされた羽黒山はさぞ神々しく映ったことだろう。幻想的なその風景を思い浮かべながら歩を進めると、広大な敷地の「御本坊跡」がある。「四日、本坊にをみて誹諧興行」のくだりの寺跡である。さらに三の坂手前を右手に下り、南谷へ。ここには、別当代会覚阿闍利のもてなしに感謝して詠んだ「有難や雪をかほらす南谷」の句碑がたつ【翁塚】があり、かつて羽黒山の最高権威者であった別当が常住したお寺の面影がただよう。

しがらみを経てたどりつく合祭殿が迎える浄土の世界。

そして最後の難関【三の坂】。渡部さんはこのあたりの杉木立がもつとも美しいと話す。「向き合うように建つ二つのお堂【尾崎神社】は旧毘沙門堂で、【八幡神社】は八幡堂です。今も昔もこの二尊は武神がまつられ、道者にとって

は最後の関所というわけですね」。坂を上りきる手前で山伏に迎えられる。現在の建物は元禄10年に再建されたもので、現在は参拝者の宿泊所や食事処として利用されている。その先の鳥居を抜けると山頂、ついにかつての観音浄土へと到達。厚い茅葺き屋根の【三神合祭殿】が豪壮な姿を見せる。月読命、稲倉魂命、大山祇命の三神を合祀するこの本殿にお参りすることで、出羽三山の三つの山を詣でたことになるのだ。ちなみに出羽神社は、明治を待たずして第七十五代別当・覚諄の代に、神階の最高位・正一位に叙されて神社となっているという。「このように羽黒山は、神様と仏様をともにまつり、拝するといふ修験道の姿を今にとどめる御山です」と渡部さん。社殿の前には神秘的な【鏡池】。池そのものが神霊として信仰され、多くの人が銅鏡を奉納してきた。生まれ変わりの参道を上り、「諸々の罪穢れ祓ひ禊ぎて清々し」と、神拝詞の一節を思い出す。まさに心身ともに浄化されたような気持ち。身体が気持ちいいと感じるところこそが聖地なのだ。慌しい現代社会にこそ、静かな時間が流れる聖地が必要なのだと思う。

出羽三山とは

開山1400年の歴史を刻んだ
山岳修験の聖地。

出羽三山とは、月山、羽黒山、湯殿山の総称です。約1400年前の推古元年（593）に、第三十二代崇峻天皇の皇子である蜂子皇子により開山されたといわれています。日本古来の自然崇拜に、仏教、道教、儒教などが習合し、

鎌倉時代には「八宗兼学の山」と称されました。幾多の変遷を経て独自の宗教文化を形成してきた、全国に知られる山岳修験の聖地です。羽黒派修験道の根幹を成してきたのは、「死と再生」という思想。三山はそれぞれ、

羽黒山で現世利益を願い、月山では死後を体験。そして湯殿山で功德を得て、再び生まれ変わる。今なお、「三関三度の霊山」として人々の篤い信仰を集めています。



羽黒山

往時の隆盛を今に伝える、
歴史的文化的宝庫。

羽黒山は、西の祓川と東の立谷沢川に挟まれた海拔414メートルの緩やかな丘陵で、この一帯が出羽三山の表玄関にあたります。三本足の霊鳥に導かれた蜂子皇子が羽黒山に登り、羽黒権現を獲得。山頂に祠を創建したのが出羽三山の始まりといわれています。山頂に建つ三神合祭殿には、月山、羽黒山、湯殿山の三神

をまつり、積雪の多い月山と湯殿山は冬になると参拝が困難だったため、里宮として建立されました。現在の社殿は、文政元年（1818）に再建されたものです。表参道の杉木立にそびえ立つ国宝五重塔を筆頭に、重要な文化財や史跡・名勝など、歴史的文化的宝庫として、海外にも知られています。

三山の中では現世利益を願う羽黒山。山頂の合祭殿の出羽神社には伊氏波神（いではのかみ）と稲倉魂命（うがのみたまのみこと）をまつる。

月山

美しい高山植物に彩られた、
秀麗なる出羽三山の主峰。

山形県のほぼ中央、磐梯朝日国立公園の北域にそびえる月山は、出羽三山の主峰です。庄内から見るとお椀を伏せたような形をしていて、雪をたたえた姿は、まさに山の端に掛かる大きな月のように秀麗。ブナの原生林や珍しい動植物などの美しい自然が残り、高山植物の宝庫ともいわれています。八合目に広がる御田

原（弥陀ヶ原）の湿原には、チングルマ、ニッコウキスゲなどが咲き誇り、山頂にかけては国の天然記念物に指定されています。山頂に鎮座する月山神社の歴史は長く、約一千年前に作られた延喜式神名帳にその記述が残っています。古い時代から庶民はもとより、朝廷にも篤く信仰されました。

月山では、死後の体験をし、来世の往生を願う。ご祭神の月読命は水すなわち農業や海を司り、五穀豊穡、海上安全などのご神徳がある。来年は卯年御縁年。

湯殿山

「語るなかれ、聞くなかれ」
神秘と清浄の行の山。

月山の南西山腹に連なり、なだらかな稜線を描く湯殿山。湯殿山神社は、山の北側中腹梵字川の侵食によってできた峡谷に鎮座しています。古くから出羽三山の奥の院といわれ、羽黒山、月山で修行した山伏が即身成仏の境地に入る場所とされてきました。御神体は、熱湯の湧き出る茶褐色の巨大な岩。「語るな

かれ、聞くなかれ」と戒められ、神秘のベールに包まれてきました。近くまで車で行けるようになった現在でも、本宮を参拝する際には入り口で裸足になり、お祓いを受けることに定められ、また、写真撮影も禁止されています。日本人の信仰の原点ともいえるべき自然崇拜の原型を今もとどめる貴重な御山です。

三山参りを締めくくる湯殿山は、大神のもとで功德を得て新しい命を授かる生まれ変わりの御山。鳥居を抜けた溪流のほとりに湯殿山神社本宮が鎮座。

年中行事

歳旦祭 1月1日
折年祭（御田植祭り） 5月8日

湯殿山神社本宮開山祭 6月1日

月山神社本宮開山祭 7月1日

例大祭（花祭り） 7月15日
五穀豊穡、家内安全を祈願。稲の花をかたどった霊験あらたかな梵天が御輿とともに鏡池を一巡すると、参拝客がその花を奪い合い、祭りは最高潮に達します。



鏡池の周りには昔、お堂があり、そのお堂を神輿が回っていたという。

月山神社本宮柴燈祭 8月13日

月山神社本宮祭 8月14日
湯殿山神社本宮祭 8月15日

秋の峰入修行 8月26日～9月1日

蜂子神社祭（八朔祭） 8月31日

秋の峰入修行の中で行われる祭り。真夜中、蜂子神社に

祈願した山伏たちが大柴燈護摩を行う勇壮な神事です。燃えさかる護摩が羽黒山山頂の夜空を焦がします。



諸天善神の加護のもと、煩惱は焼きつくされ、清められる。

田面祭 9月1日
神子修行 9月6日～10日

三山神社崇敬講社祭 10月15日

天有社祭 10月24日

新嘗祭 11月23日

松例祭 12月31日

大晦日から元旦にかけて行われる羽黒山の代表的な祭り。百日間修行した二人の山伏を中心に、験競べや大松明引き、国分神事、火の灯替えなど、さまざまな神事を行い、新年を迎えます。



別称・作祭り。つつが虫をかたどった大松明を切り、その網を群集が奪い合う。

出羽三山を

羽黒山で出羽三山神社を参拝した後は、周辺観光へ。

さまざまなたのしみ方ができるのも出羽三山の旅の大きな魅力です。

たのしむ

知るたのしみ

いでは文化記念館

出羽三山に伝わる文化遺産を展示、楽しみながら山岳修験を学ぶことができる施設。山伏の修行（秋の峰入）の様子や、迫力ある出羽三山の祭りを映像シアターで分かりやすく紹介しているほか、山伏が使う道具類など興味深い資料が並んでいます。



開[4月～11月]9:00～16:30、[12月～3月]9:30～16:00 休火曜日(7、8月及びゴールデンウィーク期間は無休)、年末年始 入館料大人400円、高大生300円、小中生200円 0235-62-4727

出羽三山歴史博物館

羽黒山頂にある出羽三山神社の境内にある博物館。歴史は古く、大正4年(1915)に宝物殿として設立。昭和45年(1970)、旧東光院・見善院の跡地に現在の施設を建て、博物館と改称しました。入妻風、6階建ての鉄筋コンクリート造の建物はじつに豪壮です。展示物の中でも、

齋館

羽黒山の三の坂を上ると間もなく左手に見える齋館は、参拝客の宿泊所、食事処です。こちらでは、山伏たちの手で育まれ、俳聖松尾芭蕉をもてなしたともいわれる精進料理をいただくことができます。

出羽三山の山麓で採れる旬の山菜やキノコを素材にした料理は、羽黒独特の伝統を守り続けながらも、長い歴史の中で洗練されてきました。料理名は、昔から伝わる羽黒派古修験道独自の隠語で表現されています。胡麻豆腐は「出羽の白山鳥」、月山筍は「月山の掛小屋」、わらびの生妻かけは「羽黒修験道の柴燈」、月山筍や椎茸の天ぷらは「聖山の春夏」、いり



年間を通して、講話やセミナー、山伏修行体験塾など、より深く出羽三山の世界を知るための企画も実施。なお11月28日までは、五重塔に関する資料を集めた特別企画展『禊の塔』が語る願い...』を開催中。五重塔に掛けられていた、平安時代の能書家・小野道風の書とされる扁額、地元の柿葺き職人・芳賀亀雄さんがその手仕事を再現したパネル写真、五重塔の設計図など、貴重な資料を公開。期間中には特別イベントも予定しています。



開[4月29日～11月23日]8:30～16:30(入館は16:00まで) 休木曜日(7、8月は無休) 拝観料大人300円、高大生200円、小中生無料 0235-62-2355 http://www.dewasanzan.jp

鏡池から出土した古鏡190面と銅灯篭竿は重要文化財に指定。ほかにも重要美術品の太刀銘月山、最上義光が寄進した銅製狛犬など、修験の霊山として信仰を集めてきた出羽三山の歴史を物語る貴重な資料を、数多く収蔵、展示しています。

羽黒山中興の祖といわれる天有別当の「手水鉢」や開祖の御尊像画、奥の細道行脚で出羽三山を訪れた松尾芭蕉が記した「天宥追悼句」などが収められています。

手向の宿坊街

羽黒山参りの拠点として、宿坊を中心に発展した手向地区。今も、随神門前まで約1kmにわたって続く宿坊の町並みが往時の面影を残す、日本有数の山岳宗教集落です。

昔、出羽三山に参詣することは「奥参り」と称され、東北から関東、信越地方には出羽三山を信仰する人々による講中という組織がありました。この参拝者が毎年訪れて一夜こもるのが宿坊です。

宿坊を営んできたのは、山麓の「妻帯修験」と呼ばれた羽黒修験者。随神門を境にして山上の寺院には、肉食をせず、生涯妻帯しない「清僧修験」が住み、宗務にあたっていましたが、山麓修験者は妻をめてって家庭を持ち、講の人々を厚くもてなしました。そして冬になると関東、東北地方を回り、檀那場あるいは霞場と呼ばれる檀家を訪ねて布教活動に勤しみました。

明治維新の神仏分離により廃仏毀釈が進むと、清僧修験者は姿を消しましたが、山麓の修験者は「出羽三山神社の祝部(はふり)」と名称を変えて、それまで通りの修験活動を続けてきました。今でも毎年、神社が頒布する各種の神札や作占いを持って檀家を巡っています。講中は、親から子へ、子から孫へと連綿と受け継がれているのです。

味わうたのしみ

随神門近くと山頂の茶店

羽黒山の表参道は2446段の石段。参道の途中には二の坂茶屋があり、すが、入り口である随神門の門前と、石段を上りきった山頂にも、気軽にひと休みできる茶店が建ち並んでいます。門前には、地元の菓子店をはじめ軽食も楽しめる店舗が点在。山頂の駐車場付近には4軒の茶店が軒を連ね、山形名物の玉こんにゃくを煮込む鍋が香ばしい匂いを漂わせているほか、店内では素朴な味わいの羽黒そばや力餅などを食べることができ、それらはどれも羽黒山を訪れたら食べてほしい名物ばかりです。またいずれのお店も店頭には庄内の特産品やお土産品、中には季節の山菜などを扱い、特色あふれる品揃えを楽しむことができます。



現在、手向地区には三十数件の宿坊があります。限りなく仏堂に近いような、荘厳な造りをした宿坊も残っています。宿坊は、単なる旅館ではなく、山へ登拝するための心の準備、精進齋をするための特別な宿であり、出羽三山信仰の歴史をつないでいます。

一般・個人でも利用できる宿坊については、鶴岡市羽黒庁舎観光商工室 0235-62-2111(代)または羽黒町観光協会 0235-62-2500にお問い合わせください。

そのほか、手向地区の旅館・民宿
羽黒館 0235-62-2212
多聞館 0235-62-2201



kibisoの スウィングバッグ

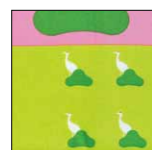
白と黒のモコモコ、シワシワなフォルムに、麻のような、木綿のような、ナチュラルな布の手触り。でも、これは立派な「絹」製品。鶴岡の伝統産業・鶴岡シルクの新しいブランド「kibiso(キビソ)」の、手さげバッグです。

写真のバッグは横糸に白のキビソ糸を、縦糸に黒の木綿糸を用いたもので、織った後、仕上げにとある作業を施すと、糸の性質の違いからこのようなデコボコしたフォルムになるという。ナチュラルな肌触りと全体のモコモコとしたやわらかな感じが、何とも可愛らしい存在感を出している。

キビソとは、カイコが繭を作るとき最初に吐き出す糸のことで、材質が太くて硬いため、昔から織物用の糸には不向きとされてきた。だが2007年、鶴岡織物工業協同組合が東京のテキスタイル専門家たちと、機械にかけられる細いキビソ糸を半年かけて研究開発したことで、キビソ織物の可能性がグンと広がった。そして生まれたのが鶴岡シルクの新ブランド「kibiso」である。

鶴岡シルクとは、明治維新によって家禄を失った庄内藩士が、刀を鋏に持ち替えて開墾した、鶴岡市羽黒町松ヶ岡を発祥地とする地域の伝統産業だ。和装用のシルクを中心に発達したほかの産地と異なり、最初から海外輸出を目的としたツヤのある洋装の薄手サテン地を得意としてきた。今回の新ブランドには、この鶴岡伝統のサテン地からキビソ100%のものまでさまざまな素材が含まれており、それらを精鋭デザイナーたちが洒落なデザインで商品化しているため、多岐に富んだ遊び心たっぷりのラインナップとなっている。

国内に巡回するシルクの9割強が外国産となっている今、「kibiso」は国産シルクの魅力再発見の鍵になるかもしれない。まだその手触りを体感していない人は、オープンしたばかりの松ヶ岡開墾場内アンテナショップへ足を運んでみては。



kibiso
tsuruoka silk

FROM
TSURUOKA
TO
EVERYWHERE

KIBISO BLUE
PANTONE 289C

キビソ・プロジェクトは、日本ファッションプロダクト協会代表理事の岡田茂樹氏が総合プロデュースを、テキスタイルデザイナー須藤玲子氏が商品開発を、「つや姫」のデザインを手がけたクリエイター佐野研二郎氏がロゴマークを、2010年毎日ファッション大賞を受賞したミントデザインなどがファッションデザインを担当。須藤氏によるキビソのテキスタイル作品は海外の美術館にコレクションされています。

kibiso shop ☎0235-62-4295 (松岡物産内)